

序章 近代日本初の本格的な英和辞書 『英和对訳袖珍辞書』

第1節 『英和对訳袖珍辞書』の概要と特徴

1. 『英和对訳袖珍辞書』の概要

『英和对訳袖珍辞書』(*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language*)は、1862年に、堀達之助(1823～1894)と、協力者である西周助・千村五郎・竹原勇四郎・箕作貞一郎(麟祥)らによって、幕府洋書調所から刊行された近代日本初の本格的な英和辞書である。英語の学習が急速に普及しつつある当時において、わずか200部の上梓であったが、発行直後に売り切れの状態になった。1866年には、堀越亀之助が再版改訂の主編に任命され、柳河春三・田中芳男らが協力し、訳語に対して大幅に訂正を加え、『改正増補英和对訳袖珍辞書』として開成所で発行された。英学の風潮が高まっていく時代において、改訂増補版の部数は当時の需要に応じ切れず、再び1867年と1869年に増刷された^{注1}。

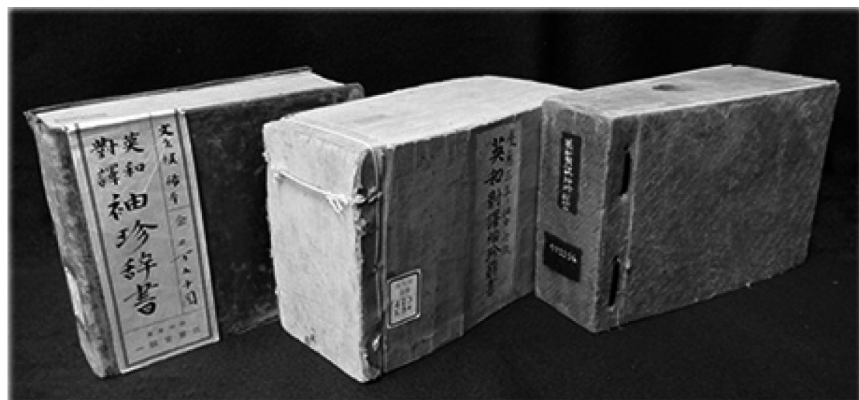
一方、英学が勃発した地域の一つである薩摩の学生—前田正毅・高橋良昭は、1869年に、堀越亀之助の改訂増補版を基にして、辞書全体の見出し語と訳語にカタカナを振り、当時長崎にいた宣教師フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck)の力を得て、訳語を全面的にチェックし、『改正増補和訳英辞書』として上海の美華書館(American Presbyterian Mission Press)で印刷・刊行した。この辞書は、薩摩の学生によって編纂されたことから、「薩摩辞書」とも称される。また、辞書の序文にはThird edition revisedと付け加えられていることから、『英和对訳袖珍辞書』第3版に当たるものである。

さらに、1871年に、辞書初版の編纂主任であった堀達之助の次男—堀孝之が、明治政府の官許を得て、アメリカの英語辞書『ウェブスター大辞典』を典拠とし、新たに8,000余りの語を追加し、第3版と同じく美華書館から『大正増補和訳英辞林』を刊行した。この辞書の序文にはFourth edition revisedと記されているため、『英和对訳袖珍辞書』第4版に当たる。それ以降も、第4版に基づき、『英和对訳辞書』(1872)、『和訳英語聯珠』(1873)、『広益英倭字典』(1874)と改版され、明治20年まで復刻版も刊行された。各版の詳細について、次の〔表1〕をもって示すことにしたい。

〔表1〕『英和对訳袖珍辞書』の諸版

各版	書名	部数	編集者	発行社	発行年
初版	『英和对訳袖珍辞書』	200	堀達之助	洋書調所	1862
再版	(第1刷) 改正増補『英和对訳袖珍辞書』	1000	堀越亀之助	開成所	1866
	(第2刷)	不明			1867
	(第3刷)	不明			1869
第3版	『改正増補和訳英辞書』(「薩摩辞書」初版)	1500	薩摩学生	美華書館	1869
第4版	『大正増補和訳英辞林』(「薩摩辞書」再版)	5000	堀孝之	美華書館	1871
			薩摩学生		

本書で用いる各版は、立教大学図書館所蔵初版^{注2}及び惣郷正明編複製初版、早稲田大学所蔵再版^{注3}、国会図書館所蔵第3版^{注4}及び第4版^{注5}である。参考までに、立教大学図書館所蔵『英和对訳袖珍辞書』初版は表題、序文、「略語の解」のページが欠損しているため、天理大学付属天理図書館所蔵本からの複製である。この辞書は、もと故大久保利謙教授旧蔵の個人文庫であったが、2015年にデジタル化され、インターネットで公開されている。それ以外にも、立教大学図書館(〔図1〕)には、1867年(慶応3年)の改正増補版、戦前の立教大学で使用されていたと思われる辞書計3冊(左初版、右2冊慶應3年の改正増補版)が所蔵されている。



〔図1〕『英和对訳袖珍辞書』初版 立教大学図書館所蔵

2. 『英和对訳袖珍辞書』の特徴

近代日本の英和辞書の嚆矢とされる『英和对訳袖珍辞書』は、H.Picard『英蘭蘭英対訳字典』^{注6}初版(1843)を底本とし、途中再版(1857)に代わり、その英蘭の部分のオランダ語を削り、当時活用されていた『和蘭字彙』、『訳鍵』などの「蘭和辞書」から日本語を移し入れて編集したものとされる。そのほか、宣教師ロプシャイト(1822～1893)から贈呈されたW.H.メドハースト(1796～1857)編『英華字典』(1847～1848年刊)の訳語を借用したことも知られている。これまで、辞書の成立についての論述は、早くは大槻文彦(1898)、勝俣銓吉郎(1914)、大槻如電(1926)、岩崎克己(1935)、豊田實(1939)、戦後では惣郷正明(1973)、遠藤智夫(1996)、杉本つとむ(1999)、三好彰(2007)、堀孝彦(2007)、櫻井豪人(2011)などがある。

その後、2007年に『英和对訳袖珍辞書』初版及び再版の編纂原稿が、群馬県高崎市の古書店主・名雲純一氏によって奇跡的に発見された。この第一級原稿資料の存在で、辞書の成立及び訳語の変遷がよりいっそう明らかとなった。詳しい考察・検討は後述の各章に譲ることにするが、ここでは、『英和对訳袖珍辞書』初版に見られるEstablishmentの訳語を例として、下の〔表2〕で簡単に説明する。なお、分かり易くするため、訳語の順番を変え、訳語の前に番号を付け加えた。

初版(1862) Establishment, s. ①固メル。②家事。③商家。④定業

〔表2〕Establishmentの訳語

項目	Establishment			
	H.Picard	Bevestiging	Oprigting	Huishouding
『和蘭字彙』	固ムル事	建ル事	家事ノ捌キ	Handel 商売 Handelaan 商人
初版原稿前	固メル			
初版原稿	①固メル。②家事ヲ為ル。③商家。			
メドハースト『英華字典』	④定業			
初版刊行	①固メル。②家事。③商家。④定業			
解説	Establishmentをキーワードとし、H.Picard『英蘭蘭英対訳字典』(1857)からオランダ語Bevestiging, Oprigting, Huishouding, Handelshuisを導き出した。そして、これらを手掛かりにして、底本とされる『和蘭字彙』を確認すると、初版にある「①固メル、②家事、③商家」という訳語が収録されているが、④の訳語「定業」が見当たらない。「定業」がどこから来たのかを探するため、メドハースト『英華字典』を確認すると、Establishmentの訳語として使用されていた。			

〔表2〕から見て分かるように、Establishmentの訳語「定業」はメドハースト『英華字典』から来たものであることは間違いない。本書の考察により、初版だけでなく、改訂増補された再版においても、再びメドハースト『英華字典』を参考資料とし、訳語に対して削除したり増補したりした痕跡が見受けられる。まず、Swingの訳語を〔表3〕において例証する。(詳しくは、本書の第3章及び第4章を参照)

〔表3〕Swingの訳語

辞書	Swing
『英和対訳袖珍辞書』初版	震動。衝キ。振り廻シ。意味。感応。手早キ
再版原稿資料	〈該当頁なし〉
メドハースト『英華字典』	鞦韆
『英和対訳袖珍辞書』再版	震動。衝キ。振り廻シ。動く勢。鞦韆

ちなみに、第3版は薩摩の学生が海外留学の資金を集めるために編纂され、印刷刊行された辞書であるが、1866年に堀越亀之助による改訂版をそのまま踏襲することなく、苦心して改訂したもので、近代英和辞書の昇華の功を担ったとも評価されている。再び改変された訳語に注目すると、第3版の訳語には微妙な変化が垣間見える。この変化の様子を見出し語 Annihilateに関連する訳語を取り上げ、〔表4〕で示す。

〔表4〕各版における Annihilate の訳語

見出し語	初版 (1862)	再版 (1866)	第3版 (1869)	第4版 (1871)
Annihilate	無ナラスル	無ナラスル	滅絶ス	滅絶ス
Annihilation	無ナラスル	無ナラスル	滅盡ル	滅絶ル
Annihilator	無ナラスル人	無ナラスル人	滅盡ス人	滅絶ス人
Annihilable	〈未収録〉			滅絶スベキ

Annihilateの訳語は、『英和対訳袖珍辞書』初版と再版とが同じであるのに対して、第3版に至っては、漢語に近い表記「絶滅」が用いられていることが分かる。面白いことに、メドハースト『英華字典』には、「滅絶」が Annihilate の訳語として収録されている。また、辞書全体の見出し語に片仮名で読み方を示し、訳の漢字にも読み仮名を振ったことが、第3版すなわち『改正増補和訳英辞書』(「薩摩辞書」初版)の最大の特徴である。当時、英学の歴史が浅く、訳語が成立したばかりで、未熟であったはずの時代においては、辞書における膨大な見出し語に対

して、英語の発音に近い表記を振ることは、辞書の実用化の第一歩を踏み出したと言えよう。この点から見れば、第3版の『改正増補和訳英辞書』は十分に史的な価値がある。勿論、これらは、薩摩の学生が精一杯工夫して仕上げたものであるが、宣教師フルベッキが辞書の編纂に携わったことを忘れてはいけない。彼は辞書刊行にあたり、英語を添削したり、印刷の段階でも上海の美華書館の所長ギャンブル (Willian Gamble) を紹介したりと全面的に協力した。

一方、第4版では、Webster辞書にある発音符号が初めて取り入れられ、訳語の表記がすべて「滅絶ス…」と統一された。加えて、新たに Annihilable 「滅絶スベキ」が追加されたことは注目される点である。この辞書は明治政府の官許を得て、第3版の上にさらに見出し語を補強し、訳語に対して修正を加えたことから、『英和対訳袖珍辞書』系列の完結版とも称される。

さらに、刊行の時代背景に注目すると、『英和対訳袖珍辞書』初版は幕藩体制が崩壊しつつある幕末期、再版は明治新政府が建立される黎明期、第3版及び第4版は新国家が形成された後の建設期であった。その後も『英和対訳袖珍辞書』は改版を重ね、当時の英学者に重宝され、明治20年まで他の対訳辞書に影響を与え続けた。従って、これらの各版を総合的に検討すれば、幕末明治初期における日本社会の様子的一端を垣間見ることができるとはならないか。

以上のことから、『英和対訳袖珍辞書』の各版は、近代訳語の形成過程だけでなく、当時日本社会の変遷をも知り得るきわめて有益な資料であるため、それぞれ精査する必要があると考えている。

第2節 研究の背景

2.1 蘭学以前の対訳辞書

日本語とヨーロッパ語の対訳辞書といえば、1593年に刊行された『羅葡日対訳辞書』(『ラ=ポ=日対訳辞書』とも呼ばれる)である。後に、1603年から1604年にかけて長崎で日本語をポルトガル語で解説する『日葡辞書』(Vocabulário da Língua do Japão)が編纂され、当時の日本語を研究する絶好な資料であると高く評価されている。その他には、1630年にマニラで刊行されたスペイン語訳『日西辞書』が挙げられる。

当時、ポルトガルとスペインの国力が衰弱していった一方、ヨーロッパ諸国の中でオランダが、日本と唯一緊密な関係にある国となった。それゆえ、徳川幕府は国内に対して鎖国政策を実施し、海外と貿易できる特別な地域を、長崎・薩摩・松前・対馬に限った。